
バラード

柊葉月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バロード

【Nコード】
N9112X

【作者名】
柊葉月

【あらすじ】
松田奈々、25歳。ごく普通のOL。初恋が甘く切な過ぎて忘れられない。その所為で新しい恋に臆病。

上司との恋が始まりそうな時、再会した初恋の彼。
抱きしめて欲しいと
甘えたいと

気持ちに正直になれない大人のじれったい恋模様をどうぞ

夢現

んッ…

AM 6 : 04 …

ベッドサイドの目覚まし時計に、ボーっとしながら視線を向けて、もう一度、目を瞑る。

だって、今日は、休日の土曜日。

予定の無い土曜日。

夢と現実の狭間を彷徨う思考をそのままに、今しがた見た夢を浮かべ自然と上がる口角はそれがあまりに甘くて幸せな想い出の一部だった為。

切なくて苦しい部分は一つも……

胸の奥がキュッと音を立てるその夢影をもう一度…と願いながら。

夢の中の私はあの頃のままの私で。

紺色のセーラー服

そんな私の隣には、学ラン姿の彼がいた。

真っ赤な顔して手なんか繋いで、懐かしい道を歩いていた。

季節は秋。

高校三年生の秋。

夕暮れの道。

「お前、東京行くから、俺も大学東京へ行くわ。お前と離れるんやっぱ耐えられへん（笑）。」

二カッと笑ってちよつとおどけて言う彼に、「…え？」なんて言葉を向ける。

東京の短大へと進路がほぼ決まってる私と、地元に残る彼とは、違う未来が待ってると思っていたから。

現実、彼がこの土地を離れて東京に行くことは不可能だとわかっていたから。

彼には複雑な家庭の事情があったこの時、幼いながらも一緒に進学できるなんて夢にも思っていなかったから彼からの言葉に私は驚いた。

「ん、だって、離れたないし、お前と。

…離れたらお前のこと他の男に取られそうで、嫌や（笑）。」

そんなに言葉数の多くない彼が軽口を言うからいつもと違う感じがした。

いつもの彼より少し寂しそうに感じた。
言葉は嬉しいのに。

「…なんかあった…の？」

「なーんもねえよ。」

…一緒に東京行くの、嫌なん？お前」

そう言つて私の顔を覗き込んできた彼の瞳がやっぱり寂しそうに思えてならなつた。

それが凄く切なくて、そつと彼の背中を抱きしめた。

「奈々…、東京一緒に行こうな。」

「…ん。」

でも、瑛斗、大丈夫…？」

「…、な、にが？」

戸惑うような

不安を見せつけるような彼の声に胸がギュツと締めつけられた。

「でも…、家…の、方は、大丈夫…？」

お母さんと二人暮らしの彼。

何かとお金がかかる野球を小学生の時から続けさせてくれてるお母さんに、言葉には出さなくても感謝して労わっている彼を私は知っていたから。

そんなお母さんを置いて東京へなんて、彼らしくないと思った。

「ああ…。」

大丈夫なんじゃねーの？男と一緒に暮らすんだってさ。」

どこか突き放すような声が、瑛斗の心境を物語っているのかも知れ

ない。

けど、まさか。

突然の話に私も頭の中が真っ白になった。

え…？

瑛斗のお母さん…が？

「…結婚するの？おばさん。」

口にしてもまだ、どこか遠い話のような気がする私を抱きしめる腕の力が強くなった。

「…みたい。」

俺、知らへんかったし、オカンに男居るとかさ。

結構金持ちの男みたいやから、俺、東京の大学行きてえなんて言うたら、満面の笑顔でさあ、全力で応援するから頑張れだとかさ。

結局、俺の事、邪魔なんやろ？

キモいわ、あいつら。

あの年でいちゃこくなちゅうーの。」

軽口風な瑛斗の言葉が寂しくて、でも、上手い言葉が見つからなくて私は瑛斗の広い背中をギュッと抱きしめた。

私、大好きだから。

瑛斗のこと大好きだから。

初めて自分より大事だと思った人だから。

誰よりも大好きだと

愛しいと思えた人だから。

切なくて

苦しくて

伝わる寂しさに涙が零れそうになった。

「ずっと、お前は俺の傍に…居てな？」

言葉の深い意味をこの時はわからなかった。

遠い昔の私も、夢の中の私もわかっていなかった。

ただ、嬉しいと、彼の中の寂しさを見つめないで17歳の私は、この彼の言葉の甘さだけに心の底から、幸せを感じた。

切なさや苦しさに気付いてるのに、それが何なのかわからずに。

大人になった今の私には、少しは瑛斗の言葉の重さを理解することが出来るけれど、今となっては、それは遠い記憶の甘酸っぱい思い出…。

「同じ大学には行けねえけど、頑張んねえとな。お前と同じ街になれるんは、すんげえ嬉しいし、俺。」

「うん。」

学校、違っの寂しいけどね（笑）。」

「あは、マジ、無理やる？」

俺、決めた志望校、W大だし、お前短大だし（笑）。

しかも、お前の短大女ばかりやる？

それにさ、お前は指定校推薦でもうだいたい決まってるから大丈夫やけどさ、俺、これからやで？

俺だけ落ちるとか、シケル…」

「（笑）。

大丈夫やって。

瑛斗、野球してんのに、びっくりするくらい成績良いもん。
絶対大丈夫。」

瑛斗、頭良いもん、しかも、超努力家だし。
きっと、目指す難関校も合格するよ。

「お前と一緒に街、行けると思ったら、死ぬ気で頑張れるから、俺。」

「（笑）。」

私の肩に顔を埋めて照れ臭そうに呟く彼が愛しくて背中にまわした手をゆっくり動かしだした。

伝わりますように

この愛しい気持ちがいっぱい伝わりますように…

「ずっと、一緒やからな、俺ら。」

「…うん。」

そっと、添えられた肩に置かれた手。

近づいた少し瞼を伏せた綺麗な顔にドキンと胸が高鳴って、重ねられた唇の熱さに溶けてしまいそうだと思った。

そこで覚めた夢は、あまりに甘くて幸せで切なかった。

あの時

あんなこと…

悲しい記憶が甦って来そうで私は頭を振った。

そして、甘い記憶を頭の隅っこから引っ張り出して、幸せな初恋を思い出すことにした。

初恋

大好きだった。

信じられないほど大好きだった。

一生一緒：なんて真剣に思った初恋。

硬式野球部のエースピッチャーだった瑛斗。

私の初恋の人。

出逢った時からずっと坊主頭だった彼も、高校三年の夏の大会で引退後、髪を伸ばし始めて、夢の中の彼は、そんな時代の彼だった。もともと綺麗な顔してた彼は、髪を伸ばし始めたら、泥臭さが抜けてどこか垢抜けちゃって、新しいトキメキを覚えたのを夢の中の私も感じていた。シンクロする、現実のあの頃のトキメキと、今、夢の中で感じたトキメキ。

繋がれた大きな手。

ゴツイ掌は、野球を一生懸命した証。

大好きだった。

真っ黒に日焼けした顔に真っ白な歯を見せて笑う姿が。

学校から自転車です30分。

二人乗りした自転車。

向かった夕焼けの海岸。

防波堤の突端まで歩いて、そっと抱き寄せられた時の胸の高鳴る鼓動あの頃感じた胸をときめかせる大きな拍動が今も鮮明に思い出される。

ドキドキした。

ドキドキする。

そっと肩に置かれた手の暖かさと、カラダに駆け巡った熱。

触れた彼の唇の感触。

それをリアルに今も覚えていて、初めてのキスの甘さも切なさも綺麗な思い出として私の中にある。

私の青春時代は、今朝見た夢の中、現れた彼：香坂瑛斗こうさかえいと一色だった。

「…付き合って欲しいんやけど…」

校舎の渡り廊下。

呼び出されて、言葉少なに瑛斗に告白された時、夢かと思った。

野球がとても上手くて、そんなに強くなかった私達の高校を強豪チーム顔負けのチームにひっぱったピッチャーは、ちよつと有名人。

あの頃の瑛斗は、寡黙で、冷静沈着な雰囲気、それに坊主頭に細い眉が厳ついちよつと怖そうな男の子だった。

でも、野球をしてるわりに細身で、切れ長の二重が印象的な綺麗な顔立ちをしてる彼は、女子に凄く人気があった。

そんな目立つ彼は、やっぱり学校の中でも、目立つグループに居た。かっこいい子だらけのグループ。

その中でもクールな彼は、どこか特別で、女子が声をかけれる雰囲気がある冷たそうな人だった。

仲間以外寄せ付けない、そして誰にも媚びないどこか孤高の人って感じだった。

それが余計にカッコよく見えたりした。

それに、そのグループの近くに居る女の子達も華やかな人ばかりだったから、とても私が近付ける場所じゃないことだけは確かだった。

クールで無口な彼なのに、ふと見せる笑顔が可愛くて、その彼の優しさを知った時私は恋に落ちた。

……

あの日、あの場所で、あんなことが無ければきつと、恋に落ちることも無かった……

瑛斗のことをまだ、香坂君と呼んでいたあの頃。

瑛斗の優しさと、可愛い笑顔に私は……恋をした。

……

「あんだ、美術部の部室から、いつつも野球部見てるやろ？
キモインやけど。」

いきなり発せられた言葉に私は、ただ、驚いた。

確かに私は美術部で、部室から良くグラウンドを眺めていた。

あまりスポーツが得意じゃなかった私は、野球部だけじゃなくて、他の運動部のヒト達を憧れを込めて見ていた。

いつも風景画や静物画ばかり描いていた私は、今度はその憧れも込めて、躍動感たっぷりの人の動きを絵に起こしたいと思った。

だから、グラウンドの中を見下ろす様にジッと見ていたのが、彼女達、野球部の女子マネ達達の癪に障ったのかな…。

なんて思っていると、声色を低くした女子マネの中でも一番可愛いと噂の渡辺先輩の声が私を震わせた。

渡辺まゆ先輩は、私より一つ上で、学校でも目立つ存在の人だったから、私も顔と名前ぐらいは知っていた。

煌びやかでどこかゴージャス感がある渡辺先輩に凄まれて私は、恐怖感いっぱいになった。

そんな私に先輩は言葉を繋げた。

「人の男にちよっかい出すな。可愛こぶってキモイ。」

人の男？

って、何？

意味わからなくて混乱している私に、渡辺先輩と同じジャージ姿だからきつと、先輩と同じ野球部の女子マネ仲間の人たちが私にキツ

イ言葉を投げつける。

「ちょっと可愛いからって、ええ気になんなよ。」

「ムカつくじゃ、クソ女。」

「消えるよ。ちゅーか、死ねば？」

辛辣な言葉が続くけど、私は、何が起こってるのか理解できないまま、ただ、罵倒され続けた。

一年の二学期。

少し肌寒くなってきた11月。

勝手な勘違いで、逆恨みされた私は、二年生の先輩三人に呼び出されて、やるせなさを噛みしめていた。

ジャージ姿の先輩は、野球部の女子マネ。

意味わかんないのに、凄まれて、私は、スカートをギュツと握りしめて震えるだけだった。

先輩の一人の彼に私がちよっかい出したとか、全く身に覚えのないそれに、私は返す言葉も見当たらなくて、ただ俯くだけだった。

今思えば、弱過ぎる自分に歯痒い一場面なんだけど、あの時は、ただ、怖いだけだった。

「譲^{ゆず}は、ウチの彼氏なんよ。」

なんで、一年の何の接点もないお前に取られやなあかんの。」

譲って誰なん？

取られる？

なんのこと？

そう思うのに、上手く言葉が出ない私は、ただ、俯いて震えるだけ。

「井坂くんも、こんなしょうもない女のどこがええんやろ？
ってか、口無いん？なんか、言えや。」

井坂君って誰なん？

知らんし、そんな人…。

口無いとか、言われても、何言えばいいのかわかんない…。

俯くだけで何も言わない私に苛立った先輩が、私の肩を突き飛ばした。

そのはずみで尻もちをついた私に、「これでも喰らえよ。」と、笑った時、傍にあった水道の蛇口を捻って、ホースから私に水を放った。

直撃…

する…

そう思って目をつぶったのに、私に降る水飛沫はささやかなもので、恐る恐る目を開くと、蛇口を締めて、先輩の手からホースを取りあげた白い野球部の練習着姿の彼が、居た。

「香坂…。な、んで？」

女子マネの一人がまずいつて感じで、彼を見た。
そんな女子マネを睨むように、香坂君が淡々と言葉を発した。

「何してんの？」

さつきから見ただけど、やり過ぎやろ？

そんなんやから、井坂先輩にフラれるんちゃうんですか？渡辺先輩。

「

「ック…、この女が悪いんやん。」

そう言って私をグッと睨みつけてきた先輩の顔が怖くて私はまた、俯いた。

「こいつ、なんも悪ないやん。

井坂先輩が勝手にコイツの事、好きになったんちゃうんか？

それに、こいつ、井坂先輩の存在も知らんと思うけど。

お前、“井坂譲”って知ってる？」

と、香坂君が私を見た。

その瞳が優しく、私は静かに頭を横に振った。

そして、やっと言葉が口を吐いた。

「私、井坂…先輩とか、全然知らん…。し。それに、グラウンド見てたんは、運動音痴の私にとつたら、運動部の皆が憧れで、眺めてただけです。」

…誰を見てたとか、無いです。」

そう言えた時、少し気持ちが穏やかになれた。

香坂君の優しい瞳が私に勇気をくれた気がした。

「なあ、渡辺先輩達、こんなことしてんのばれたら、余計ヤバいと思いますけど。」

それに、俺、コイツの事、同じクラスやし知ってるけど、人の男取るとかそんな高度な技術無いっすよ？

ってか、ほんま、…まじ、ム力つくんやけど。

あんたら、コイツに、謝れよ。」

言葉尻が急に敬語じゃなくなった香坂君の言葉が凄くキツク感じた。そんな香坂君に先輩達が怯んだように一步下がったのが見えた。

「…松田さん、ご、めん。」

先輩がチラツと私を見て、そう言った。

そして、「香坂、譲に、言わんといてくれる？」と、震える声で聞いたのが聞こえた。

それに、香坂君は、「コイツに金輪際こんなことせーへんかったら、言わんでもないですよ。」と、少し意地悪く答えたのに驚いた。

香坂君を見上げた私に、片眉を上げて、「先輩達のシたこと間違ってるんは、わかつといってください。」と、言葉を締めくくった。

そして、私の腕を掴んだ香坂君が、「着替えに行こ。」と、校舎の中へと私を歩かせた。

「そ、そんなに水かかってへんから、大丈夫、やで？」

そう言う私に無言のまま、香坂君は、私達の1 - B組の教室に連れてきた。

「お前、体操服持ってるんか？」

ドアを閉めた香坂君が私の腕を話して聞いてきた。

「…持つてないけど、ホントに大丈夫やから。
ありがと、ね。練習の途中やったん違うん？戻ってよ？」

これ以上迷惑掛けられない気持ちと、なんか恥ずかしい気持ちに塗れて声が上擦った。

そんな私にお構いなしに香坂君が、自分の置きっぱなしにしてた雰囲気のバッグから、紺色の服を取り出した。
そして、それを私に手渡してきた。

「これ。あんま綺麗違っけど、臭くは無いはずやから。
制服の上に着ろよ。」

ちよつとは、寒くなるやる？」

ニカツと笑った少しはにかんだ笑顔に胸がドキドキ大きく鳴り始めた。

あまり笑顔なんて見せないから、余計にその屈託ない笑顔に胸が高鳴った。

「ほら、早く着ろよ。」

お前、鞆、美術室か？」

「あ、え、…うん。」

「外、暗くなる前に帰れよ。」

私は、ブカブカな学校指定の体操服じゃないじゃない、多分、野球部の人を着るウインドブレーカーとかいうそれをセーラー服の上か

ら着た。

「うわ、ブカブカやな（笑）。
でも、寒いよりマシやろ？」

「うん。」

ありがと。」

「お前って、電車通学違うよな？」

「？うん。」

「徒歩？」

「？うん。」

そう答えた私にまた、ニカツと笑った香坂君が、頷いた。「うん、
ほんなら、その格好でも、恥ずかしいやろ？」

……
きつと、これが私が瑛斗に恋に落ちた瞬間。

初めて男の子に感じたときめきや胸の高鳴りを恋だと認識するのに
少しだけ時間がかかったけど、彼の肩に女の子が触れたのを見た時、
私の胸はチクンと痛んだ。

触らないで…

そう思った。

それを嫉妬だと認めた時、私は、彼を好きだということが認めざるを得なかった。

でも認めたら案外楽なもので、私は恋することに幸せを感じた。

大好き…

大好きな人。

でも、彼と私は接点は同じクラスってだけだったし、目立ち過ぎるくらい目立つ彼と、地味な私とでは、存在自体が違い過ぎるから、私は見てるだけで良いと思っていた。

あの時、たまたま通りかかった香坂君が私を助けてくれた偶然に感謝しなきゃ、あのひと時が私の全てだったから。

それに、あれ以来話すこともほとんどない私と香坂君だったから。

だから、決して気付かれることない私の片想いだと思っていた。
なのに…

アルバム

「二年なつて、クラス離れたから…。言わな、あかんと思って…。ずっと、好きやったんよ、俺、松田さんのこと。」

照れ臭そうに首の後ろを掻く彼の耳が赤くなってるのに気付いて、私は、体中の熱が顔に集中しちゃったじゃないかってくらい顔に火照りを感じた。

彼も真っ赤。

わたしはもつと真っ赤。

そんな校舎四階の渡り廊下。

春の日差しは柔らかで、優しく、渡り廊下から少し見える桜の木の緑が私の中にずっとある。

「あたしも…、香坂くんのこと、ずっと…す、き…でした。」

あの日から、ずっと…

告げるはずの無かった私の気持ち。

そう答えた私にすこしだけ驚いたように、俯いていた顔をぱつと上げた彼が「ま、じ？」なんて言うから、私はただただ、首をゆっくり縦に動かした。

「めっちゃ、緊張したし…。」

そう言つて、その場にしゃがみこんだ彼を私も夢心地のまま見下ろした。

腕で抱えた膝の中から顔を上げた彼が私を見上げた。

「…じゃあ、今から、俺の彼女つつうことで…、よろしくお願いします。」

「…こちらこそ、よろしく、お願いします…」

初めての彼。

初めて手を繋いだ。

初めてキスした。

初めて触れた。

初めて自分の全てに触れた。

私の初めてを全部捧げた人…

大好きだった。

精一杯愛した。

多分、愛されてた…。

結局、幼かった私たちは、それを上手く育むことは出来なかったけど。

だから想い出。

全力で恋した初恋は20歳の時に呆気なく終わっちゃったけど、私にとって切ないお終いだっただけ、見る夢はいつも暖かくて優しいから、忘れられない。

こんな夢を見た所為なのか、夢現ゆめうつの私は、一瞬、あの頃覚えた瑛斗の優しい匂いを感じた気がした。
あの頃、瑛斗愛用の制汗剤と瑛斗の匂いが混じったそれが大好きだった。

瑛斗、今、どうしてるのかな？

二十歳で別れてから、逢っていない、大好きなひと。

あの頃気付いてあげられなかった深いところの瑛斗の寂しさを今の私なら、きっと、わかってあげられたのに…。なんて、思う私は、きっと、まだ、思い出の中の瑛斗を想ってる。
私からさよならしたくせにね…。

今も、こうしてたまに私を切なくさせる、…忘れられないひと。

眠気を纏ったまま覚醒しない私は素直に自分の気持ちを確認する。

まだ、好き？

うん、まだ好き。

それは即答。

他の人じゃ無理？

ううん、それはない。

現にあれからも、それなりに恋をした。

そのときは、瑛斗のことは遠い過去の想い出になっていたのは確か。なのに、ふとした瞬間、思い出すのは、瑛斗。

たくさん恋をした訳じゃないから、それぞれの恋を、色々確かに覚えてるのに。

思い出すのも、夢に現れるのも瑛斗だけ。

それだけ私の中に鮮烈にある瑛斗との思い出。

きつと、一生甘くて切ない初恋は私の中から消えることなんてないんだろうな、と思う。

「…さて、起きようっかな。」

ベッドの中大きく伸びをして、目を覚ます。

「掃除、しなきゃな。」

昨日、美夏が見たいなんて言うから。
あんなアルバム出したの間違いだったよ…。
だから、夢見たんだよ…、もう、、、」

昨日の夜、会社帰り誘われるまま飲みに行った流れで、ウチに寄った友達柏木美夏^{かしわぎみか}が、「奈々の高校時代見せてよ。卒アルあるでしょ？出してよ。あんた、随分素敵な恋したみたいだし。」なんて、急に言いだすから、クローゼットの奥から、引っぱり出した高校の卒業アルバム。

なんとなく話した高校時代の恋。
美夏に話すのは初めてだった。

うつん、高校時代の友達以外で瑛斗とのことを話したのは、美夏が初めて。

ただ、たまたま付けたテレビの中、映った映像が初々しい初恋の話しだったから、自然とそういう向きの話になって、話しただけ。そんな私の話に美夏は「キュンってしちゃうね。私はそんな恋したことないよ。」なんて、必要以上に喰いついてしまった。それで前述のアルバムに行きついちゃったんだけど。

「カッコいい子だね。
奈々の初彼。」

「…うん。
すごくカッコ良かった（笑）。」

「（笑）言うねえ。で？…今も、好き？」

「…だね。
でも、想い出だよ。」

「…すごくいい思い出、か。」

「大好きだったからね…、私（笑）。」
そう言って笑った私を見て美夏が目を細めた。

「私も、奈々のその頃の思い出と一緒に居たかったな。」

「（笑）なーに言ってたんだか。」

「だって、私、めっちゃ奈々のこと好きだもん（笑）。」

だから、私の知らない思い出いっぱいなんて、ちよっと妬けちゃう（笑）。」
そう言いながら綺麗に笑う美夏。

「結城さん、聞いたら泣いちゃうよ（笑）。」

「ふん、あんな男どーでもいいつつの。」

美夏は、今の会社の同期で、一番の友達。
さばさばしてて、はつきり物事を言う美夏は、最初正直苦手だと思
った。

四大卒の美夏と短大卒の私は、その時点で年齢も違うし、色んな差
があつた所為もあるんだけど。

だけど、新人研修の時、ふとしたきっかけで仲良くなった。

それからは、男性顔負けの仕事をこなす美夏と、そんな仕事の補佐
の私とじゃ、色々格差はあるし、それこそ仕事の内容なんて全然違
うけど、大の仲良し。

モデル顔負けのスタイルに、勝気で一見冷たそうにも見えちゃう位
美人さんな美夏と、おっとりしてて何の取り柄もない普通な私が仲
良しなのも傍目には不思議だと思うけど、一緒に居て一番楽で、一

番信頼できる美夏は、きつと、私の親友。

そんな美夏が、最近付き合いだした年上の彼と喧嘩したなんて言うから、愚痴でも聞いてあげようなんて誘われるまま自棄飲みに付き合っただけなのは、いつもの流れ…、って言ってもこの年上の彼・結城さんとのことでは初めてだったけど（美夏は恋多き女だから（笑）ね）。

そのままウチに泊まるなんて言いだした美夏にちよつとだけ溜息が出たけど、これまたいつもの事と、仕方ないなと招いたのに。

イイだけ彼氏の愚痴を言っただけ、私の想い出を広げっぱなしのまま、深夜かかって来た結城さんからの電話にしつぽを振って帰って行った美夏は、アルバムも飲みかけのチューハイも全部そのまま。

「今度、美夏にいっぱい愚痴ってやる…」。

部屋中お酒臭いし、散らかっちゃってるし。

アルバムこんなページで開けばなしなんて、もう…。
切ない気持ちになっちゃったじゃんか。」

広げられたままになった卒業アルバム。

最近開くこともなかったそれは、また、私に胸がキューツと音を立てるほどの痛みを誘った。

そこには、瑛斗が野球部のユニフォームで友達とハイタッチしてる姿が映っていた。

忘れられないこの光景。

最後の夏の大会地区予選。

準々決勝での、瑛斗。

このハイタッチは、ホームランを打った瑛斗が、ホームベースを踏んだ時のモノ。

泣いちゃったんだよね、私。

嬉しくて、感動して。

「瑛斗、最高にカッコ良かったな…
…、あー、もう…。」

思い出に浸るのやめよーっと。」

ボタンとアルバムを閉じて独り言を呟いた私は、窓を開けて朝の空
気を胸いっぱい吸い込んだ。

刹那

窓を開けて空を眺めた。

遠い過去が行き来する今朝は、自棄に切ない気持ちが込み上げて来てダメ。

大好きだったな…

でも…

やっぱり占領し始めてた記憶の欠片が私を苦しくさせるのに、溢れだした想い出が私をいっぱいに行った。

瑛斗との恋は、あやふやなまま二十歳の夏に終わりを告げた。

瑛斗のことを信じ切れなかった私の所為…

でも、あの時、疑心暗鬼が私の中で確実なものになって、瑛斗の彼女でいることが心底疲れた。

だから、自分の決断に後悔は少しだけ…のはずなんだけど。

「もう、無理だよ。

瑛斗の言うこと、全部嘘に聞こえる。

別れよ。」

そう告げたあの時の瑛斗の苦しそうに歪んだ表情を思い出すのが嫌でカラダが拒絶する。だから、今もそれが現れそうになる時、私の脳は一気に霞がかかったようになる。

なのに、瑛斗に言った言葉や、その時の風景は鮮明に浮かぶ。

あの日は日曜日。

何となく突然訪れた瑛斗の部屋。

お昼前だったから、パスタでも作ろうかと、その材料を抱えて、渡されていた部屋の鍵でドアを開けた時、目に入ったそれに私は、一瞬で心が真っ暗になった。

鮮明に思い出せる。

玄関先に並べられた、瑛斗の黒いスニーカーと、パールのイミテーションが施された私のじゃない白い華奢なミュールを見つめた。

楓さん…の。

瑛斗のゼミの仲間。

それがいつもの瑛斗の言葉だった。

でも私は気付いていた。

女の勘ってやつ。

十中八九当たっちゃうあれ…。

瑛斗がゼミの仲間を私に紹介してくれた時、その中に楓さんがいた。私達より一つ年上だけど、学年は一緒だと言っていた。

優しい言葉とは裏腹に明らかに私に向けられる瞳は、敵意満載だったから、私は苦手だと思った。

絶対に瑛斗に好意を抱いている楓さんなのに、瑛斗はまるっきりそれに気付かない態度で接するから、心がざわついた。

それにきつとあの頃、瑛斗は私より、彼女と過ごす時間が多かったと思う。

瑛斗は、自分にあからさまな好意を抱く女の子には、すごく警戒して敬遠するけど、仲間だと思っている彼女には、あらゆる面で許容

範囲が広がった。

それにやきもきするのに、それを告げて嫌われるのが怖かった私はそれのある意味黙認していた。
それがあざとなった。

玄関先のモノ音に気付いたのか、瑛斗が寝ぐせの付いた髪をガシガシ掻き耨りながら、「なんか、忘れモン？」なんて、意味不明な言葉を発しながら半分閉じたままの目をこちらに向けた。
一瞬で見開かれる瞳が、私を余計に苦しくさせた。

「え、あ、…奈々？ど、した？」

なんで焦るの？

焦る必要があるの？

言葉を発しない私に瑛斗の視線が足元に向かって、小さい声で、
ヤベッ…って言ったのが聞こえた。

ああ、お終い。

私は、瑛斗の言葉も待たずにドアを閉めた。
そして、思いっきり走った。

逃げ出した。

苦しくて

悲しくて

悔しくて…

手に持ったままのスーパ―の袋を抱きしめた。

「ちょ、待てよ。」

グツと掴まれた腕。

瑛斗の声。

整わない呼吸をそのままに私は、瑛斗の腕を振り払った。

「触らないで。」

怖いくらい冷静な声が出た。

そんな自分に自分自身が驚いた。

涙も出ない。

「聞けよ。」

昨日、ゼミの流れで、飲みに行つて、楓が飲み過ぎちゃったから、仕方なく俺の家に連れてきてただけだから。

なんも、ねえ。

マジ、なんもねえから。

それに雑魚寝なんて、たいしたことねえじゃん。」

瑛斗が連れて来なきゃなんない理由がわかんない。

雑魚寝？

ふたりつきりで？

「瑛斗にとってはたいしたことじゃなくて、私は、無理だから。」

「やましことしたわけじゃねえのに、何が無理なんだよ。」

俺が好きなのは、お前だけなんだよ？

もっと、信じてよ。」

いつもカッコいい瑛斗が眉を八の字に下げた。

少し困ったその時折見せる可愛いこの仕草が好きだったのに、この時は、それすら嫌だと思った。

涙も出なかった。

瑛斗の言い訳なんて聞きたくないと心が拒絶したから。

「…もう、いいから。」

私、瑛斗の言葉全部、嘘に聞こえる。」

「は？」

「嘘に聞こえちゃうの。」

楓さん、瑛斗のこと好きなんだよ。

なんで、そんな人、家に泊めたりするの？

あの人、私に向ける目、怖いもん。」

「はあ…。」

冷静になれよ。

楓が俺を好きなんてお前の思い過ごし…。」

大きな溜息の後、呆れたように言葉を繋いだ瑛斗を遮って、私は、別れを告げた。

「もう、いいよ。」

何を話しても、きっと、ダメだよ。

私、無理だよ。

瑛斗の言うこと、全部嘘に聞こえる。

別れよ。」

瑛斗の顔が一瞬で歪んだ。

私はそれを見たくなくて、俯いた。

「お前、それ、マジで言ってるの？」

低くくぐもった声は初めて聞くものだった。

「うん。私、瑛斗の傍にいるの疲れちゃったよ。」

そう答えた私に瑛斗は、もう何も言わなかった。

そして、私の前から、踵を返した。

呆気ない終わり。

きつと、私の存在はこの時点で、この程度のモノだったんだ。

希薄になった二人の関係をまざまざと見せつけられた。

それを感じながら、私も、その場を後にした。

背中に背中を向けて…

呆気ない終わり。

歩きながら、瑛斗のアドレスを削除した。

削除した途端溢れだした涙に自分自身呆れた。

あの頃、就職活動で忙しい私と、大学二年の瑛斗では、どこか歯車
が噛み合っていなかった。

時間も、友達も、全部が。

でも、それでも瑛斗は、私との時間を作ってくれようとしたのに、
私は、バイトに、就職活動にと瑛斗の努力に気付けずにいた。

それより、瑛斗からの電話の向こうから聞こえる彼女の笑い声が無
性に苛立ったりして、早く電話を切りたいなんて思ってしまう。

「明日、久しぶりに飯食いにいかね？俺、バイト代出たんだわ。」

「…明日は、バイト入ってる…」

「そっか、バイトじゃ、しかたねーよな。」

「うん、ごめんね。週明けならバイトも休み取れるよ？」

「あ、俺、週明けは、予定入ってるわ。」

「…そっか…」

私の気持ちを労わってくれない…。

不平不満がいつぱいの醜い私の心を瑛斗に見せる訳にはいかないから、私は、必然と言葉少なになっていた。

お互いに思いやれるほど自分達に余裕もなかった私と瑛斗は、お互いに二人の關係に歪があることに気付かないで居たのかもしれない。

切ない記憶は、何故か瑛斗の顔がいつも曖昧。

なのに、その時の言葉、風景や光景は恐ろしいほどリアルに覚えていて、今も私の中にある。

それを思い出すたびやっぱり苦しくて切ないのは、まだ、それを引き摺ったままだから。

だって、仕方ないでしょ？

あんなに恋して
あんなに愛して

あんなに大切だった初恋。

全部が瑛斗一色だった私の青春。

在り来たりな別れだった。

瑛斗からのさよならを聞かないまま。

連絡を取ろうと思えば取る手段なんてたくさんあったのに、それをしなかった瑛斗が答えだった。

自分からさよならしたのに。

ずっと、失恋した気分の私は、傷心のまま。

大好き過ぎて潰れちゃった私の初恋を思い出したこの日、私は、新たな恋を知ることになった。

突然

改めて自己紹介。

こんな想い出を今も少しだけ引き摺る私、松田奈々（まつだなな）、25歳。

短大卒業後、この就職難の時代、どうにか一部上場企業の営業補佐の事務職に就いて5年目。

仕事は色々大変だけど、もともと前へ出る性格じゃない私は、この補佐と言う仕事にやりがいを見いだせていた。

仕事もあつてそれなりに生活していく上で困らないほどの収入もあるし、美夏みたいな素敵な友達も居る。

こんな毎日は、充実して過ごせていると思うんだけど、今朝みたいな夢見ちゃった日は、ちょっとだけ胸がキュツと締めつけられて、切なくなる。

恋人がいたらもっと、違うのかもしれないんだけど。

私は、瑛斗との恋以来、男運がつていうか、恋愛運がさっぱりだと自負している。

短大の時は瑛斗を引き摺ったままで、恋なんて出来なかった。

OLになって、美夏に誘われるまま何度か行った合コンも軽く付きあつたり出来ない私にはどうも向いていないみたいだった。

優しくしてくれる男の人に嫌悪感すら抱く自分が嫌になるから、美夏には正直にそれを伝えて合コンには参加しなくなっていた。

「何年、恋してないんだ、私…、枯れちゃってるよ…。」

なんて一人自嘲気味に呟いて、取り敢えず腹ごしらえと、焼いたトーストにマーガリンを塗って、氷でいっぱいに満たした大きめのグ

ラスにコーヒーを注いだ。

ステレオをonにして、最近お気に入りの音楽を流して、穏やかな休日の朝を満喫することにした。

窓のカーテンを揺らす風に心地良さを感じて、この穏やかな時間が大切に思えた。だから、まあ、恋人なんて要らないや、と、漠然と思う。

齧ったトーストの焼け方が最高で、もっと、幸せな気持ちになった。

シーツ洗って、布団干して、

洗濯して、掃除して、

天気の良い休日を満たす計画を巡らせながら、さっきまで頭を占領してた過去を払拭した。

なんか、お腹減ったかも。

取り入れた洗濯ものを積みながら、磨いたリビングの窓から空を眺めた。

西日が雲を照らして、夕暮れが近いことを教えてくれた。

お昼ご飯、カップスープだけだったし、お腹空くはずだわ。なんて思いながら、畳み終わったタオルを片づけて、買い物に行こうと財布を手を取った。

予定の無い土曜日は、いつもこのパターン。

掃除を終えて洗濯を畳み終えたら、一週間分の食材を買ったために、自転車で5分そこそこで行けるスーパーへ向かう。

近場のスーパーだし、知り合いに会う可能性なんてほとんどないしと、私は、薄手のパーカーにジーンズなんて恰好のまんまで、外に出た。

自転車で行く予定だったけど、何となく、歩いてのんびり行きたいな、なんて思った私は、そのままゆっくりスーパーへの道のりを楽しむことにした。

この場所に越してきて、二年とちよつと。

色々困ったことがあった前のマンションからここに越してきて、大成功だった。

緑が多くて、買い物の不便もなく、しかも会社まで、乗り換えなしに行けるここは、最高に住み心地が良い。

今、住んでるマンションは、まだ、新し目だったし立地条件が良いから、自分の予算よりちよつと家賃が高いのが玉に傷だったけど、即決した。

この1LDKは私のお城。

単身用の設計の割にキッチンが充実してるし、何より日当たりの良さが大のお気に入り。

少しだけ遠回りして最近発見した美味しいパン屋さんに寄り道した。そこで、食パンを一斤買って、私は足取りも軽くスーパーへと向かった。

スーパーの駐車場を横切って店内へと入ろうとした時、後ろから声がした。

「松田？」

良く知った声のような気がして、でも、こんな場所？

なんて不審に思いながら、振り向くと、予想通りの人が私に向かって、小走りに歩み寄って来た。

「日高主任…、え、？なんでこんな場所にいらっしゃるんですか？」

「フツ（笑）、こんな場所って。俺ん家、この近く。」

へえ。うちと近所なんだ…、知らなかった。

仕事以外の話なんてほとんどしたことないしなあ。でも、駅同じなのに、会ったことないな。

色んな疑問が頭の中にいっぱい。私に主任がクスツと笑った。

「松田もこの近くなの？」

「へ？」

「（笑）へ…って。

家、この辺りなの？」

「はい。そうなんですけど。」

「けど？」

聞き返されただけなのに、ビクツとしちゃうのは、上司だからかな。どこか高圧的に聞こえるそれに怖々になる答え。

「いえ。…主任がご近所だったなんて知らなかったんで、ちょっと

驚いただけです。」

「二週間前に越してきたばかりだからな、俺。」

「二週間前、ですか？」

「そ。まだ、部屋中ダンボールだらけ。」

「そうなんですか…。」

「松田は、こんな場所に何しに来たの？」

口端を少し上げた主任は、会社での顔と少し違って、怖いのに優しい感じがした。

「ご飯の材料買いに来たんです。」

「へえ。」

お前、作れんの？」

ちよつとバカにした口調。

「自炊7年目ですから。」

こつち出て来てからですもん、ちよつとは作れるようになります。」

口調を強くした私に、ククツと笑った主任が私の至近距離まで近づいた。

「知ってるよ（笑）。

いつも昼、弁当食ってるよね？」

「え、はい。」

「ランチ行く子多いのに、ね。」

んん。バカにされてる？私。

「だって、毎日ランチなんて、私には無理、です。（お金が続かないよ…）」

そう答えた私に主任は笑いながら、「松田って、堅実だもんね。だから、買い物なわけね。俺は、飯作るの面倒だし、食いに行くのも一人だからつまんねえしと思って、飯、買いに来たんだよね。」

また一歩私に近づいた主任が意味深に口角を上げた。

近い…

近過ぎ。

「う、ご飯ですか…」

…あれ？主任、スーツなんだ。

休日出勤してたのかな？

休日出勤なんてほとんどしたことない私とは凄い違いだ。なんて悠長に思っていると、「すっぴん、可愛いね。」と、私の姿を上から下、下から上へと視線を這わせた主任がフツと笑った。

バカにされてるのに、会社じゃ見せることのない笑顔に、不覚にもドキッとしてしまった自分に胸中苦笑した。

日高修二、多分30歳くらい。

私が補佐させて貰ってる営業一課渉外担当の主任。

とにかく冷静沈着、頭脳明晰、それに加えて容姿端麗ときたもんで、

誰でもドキツとしちゃう人だったりする。

でも、私は正直少し苦手だったり…。

外見と醸し出す雰囲気少し瑛斗に似てると思ったことがあったから。

でも、年上の日高主任はやっぱ瑛斗とは違うし、仕事以外係る人じゃなかったから特別私の中でなんて思うことも無かった。

エリート営業マンそのままの日高主任は、誰に媚びることもなく頼ることもしないどこか冷たさを見せる人だから。

プライベートが垣間見れない人。

取り敢えず、的確簡潔な言葉が辛辣極まりない人、そんな印象の人だった。

取引先には全然違うらしいんだけど。

完璧な営業スマイル（私は見たこともないけど）と、卒無い気配りや誠実な態度に絶大な信頼があるらしい。

その分、仕事には厳しい。

そんなクールな部分が一部の女性社員に人気があるのは周知の事実だったけど、ちょっと女性蔑視した態度が垣間見られる発言をするから、毛嫌いしてる女性社員も多数居るのも私の知ったところだった。

同じ部署に居ても接することもほとんど無かったから、ちょっと瑛斗に似てカッコいいのに勿体ない人だなくらいにしか思っていなかった。

（心の中では何気に上目線の自分に笑っちゃうけど。）

同じ部署でも係ることもないと思っていた去年の春、そんな人の専属補佐に任命された時、背中に冷たいものが走った。

今まで、専属補佐なんて付けなかったのに…。

日高主任の抱えてる案件膨大だから、仕事量半端ないし仕方ないか…。

なんてどこか他人の事のように思いながらも、厳しいけど仕事の出

来る日高主任の補佐に任命されたという現実を踏まえた私は、頑張んなきゃ、足引っ張るような補佐になっちゃダメだ、と自分に叱咤激励した。

でも、それは、少し取り越し苦労だったように、この一年で知った。確かに仕事には厳しい人だけど、言葉も足らないし優しさなんて目に見えてはないんだけど、余程なことがない限り、定時退社出来るように心配りしてくれてることに気付いたり、どうしても同席しなきゃダメな接待の時も、さりげない優しさを私は感じる事が出来た。

ホントは良い人なんだと思った。

でも、上司は上司だしそれ以下でもそれ以上でもなかったのに、今日の雰囲気がいまいちもの日高主任と違う気がして、心が異常にざわついた。

「まだ、買い物してないんでしょ？」

そう言葉を繋げた日高主任が私に少し微笑んだ気がした。

ああ、この顔、ちょっと好きかもなんて思う自分を戒めつつ、「はい、まだですけど。」と、冷静を保つようにゆっくり答えた。

「じゃあ、さ、まだ、飯食ってないんだろ？」

？

「はい？」

「そこに美味しい居酒屋、最近見付けたんだよね、行こう。」

?????

「ほら、行くよ。」

と、決定事項のように私に言葉を向けて歩き出した主任の背中を見つめた。

「さつさと歩く。」

呆然としてる私を振り返って、簡潔に言葉を発した主任に私は慌てて歩みを速めた。

す、すっぴんで、こんな恰好なのに…

そう思いながら、突然と出来ごとに頭が付いて行かないまま、主任の後について、スーパーからほど近い居酒屋の暖簾を潜った。

告白

「何飲む？」

お前、酒飲めるよね？」

案内されたカウンター席に座るや否や、日高主任が話しかけてきた。

「飲めます、けど、」

「俺、生チュー、で、？」

「あ、あたし、レモンサワーをお願いします。」

カウンターの中のお兄さんが「了解しました。」と、優しく微笑んでくれた。

少し強引な日高主任に戸惑いながらも結構居心地の良いお店だな…と、思いながら、店内をなんとなく見渡した。こじんまりとしたお店なのに、店内は賑わっていて、繁盛してる店だと思った。

「土曜の夜だしな。」

お前、食いものの好き嫌いってある？」

目の前に置かれたビールをグイッと半分以上一気に飲み干した主任が、私を見た。

うわ、なんかセクシーなんだけど…と、ドギマギする私を余所に主任は、残りのビールを飲み干した。

「特に、好き嫌いは無いです。

…けど、日高主任、喉、乾いてたんですか？」

そう聞いた私に主任が一瞬目を大きく開いてそして、空のグラスをカウンターの上に置いた。

「じゃあ、適当に食いもの注文するわ。

えーと、取り敢えず、“生” もう一個と、……………」

次々と注文する主任の声を聞きながら私は、レモンサワーを一口、口にした。

美味しい…

カウンターに次々と置かれた注文品を目の前に並べながら、主任と一緒に食べてるこの風景が何故か緊張するのに、居心地が悪くないのは、このお店の雰囲気と少し入ったお酒の所為なのかな、と思いながら、揚げだし豆腐を一口大に切り分けて取り皿に取った。

あ、美味しい。

ホントに、このお店の料理美味しいや。

パクパク食べる私に日高主任の柔らかい声が届いた。

「美味そうに食うね。連れて来た甲斐があったよ。」

「だって、凄く美味しいんですもん。」

そう答えながら水菜のサラダにお箸を伸ばした私にカウンターの中

のお兄さんが「最高の褒め言葉、ありがとございます。奈々ちゃん」と、私を見た。

ん？

奈々ちゃん？

なんで私の名前知ってるの？

ジツとカウンターの中のお兄さんを見て確認しようとした時、隣から怪訝な声がした。

「知り合い？」

「ええ、同郷ですよ。奈々ちゃん、俺のこと覚えてないん？」

懐かしい故郷の言葉のイントネーションにカウンターの中の彼を当て嵌めるけどやっぱりピンとこない。

小洒落た居酒屋に似合う風貌の彼。

長めの髪を後ろで束ねて、顎に無精髭がワイルド。切れ長の目。

遊び人風の男前に、私は知り合いなんて居ない。

「わからへんかな…」。

まあ、俺、坊主やったし、奈々ちゃんより一個上やったし、覚えてないか。

奈々ちゃんは俺らの間で有名やったのになあ。

瑛斗の奈々ちゃん」

瑛斗？…。

なんか、今日は瑛斗がたくさん出て来て、気持ちがモヤモヤ…でも、この人、瑛斗の知り合い？

「あ、もうだいぶ前にそうじゃないのにね。
今は、瑛斗の奈々ちゃんじゃないのに。
ごめんごめん。」

何…、この人…。

私は今朝何度も頭に浮かんだ名前をこんな場所でまた何度も聞いて、胸が新たに痛みだした。

踏み込まないで…

私の中に

掻き乱されたくない

私の心を

「奈々、彼、地元の友達なの？

はじめまして、俺、今奈々と付き合ってる、日高です。

俺の前で、昔の男の影匂わすのやめてくれませんか？」

隣に座ってる日高主任が、びっくりするような突拍子もない発言をするから俯いていた顔を思いっきり上げて、私は日高主任を見た。

そんな私の頭を大きな手であやす様にポンポンと撫でた日高主任が、「でも、ここの料理も酒も美味いから、これから鼻屑にさせて貰うよ。」と、カウンターの中の彼に微笑んだ。

「あ、はい。よろしくお願いします。」

これ、俺の名刺です。」

カウンターのの中の彼が、日高主任と私の前に一枚ずつ名刺を置いた。おしゃれな名刺には、酒食処“柚子流家” 店長：井坂譲 と、書かれていた。

名前を見て思い出した。
先輩。

井坂先輩。

瑛斗の一個上の野球部キャプテン。
瑛斗と居る時何度か会ったことはあったけど、親しく話したりした覚えはほとんどない。

「…井坂先輩？」

そう呟いた私にニコツと微笑んだ井坂先輩が「そ、まさかこんな場所で見えるとは思わなかったからちよつと意地悪しちゃったね。でも、奈々ちゃん、幸せそうで良かったよ。これ、お詫びと、再会にプレゼント。」と、私の前に綺麗なピンク色のカクテル、日高主任の前に薄いグリーンのカクテルを置いた。

「では、ごゆっくりしてってくださいね。」

その言葉を残して井坂先輩は、私達の前から離れた。

「偉い男前な店長だな…。」

日高主任がぼそつとそう呟いて、差し出されたカクテルを手にとった。

「そうですね…」

私も薄桃色のカクテルに手を伸ばした。

「お前、田舎ってどこなの？」

「え、っと、和歌山…です。」

「へえ、そうなんだ。」

「日高主任は、どちら出身なんですか？」

ピンクのカクテルは甘くて喉越しが凄く良くって、飲みすぎちゃいそうだなと思った。

「俺は、北海道。」

「へえ、いいなあ。」

そう答えた私に日高主任が不思議そうに顔を顰めた。

「何が？」

「え？だって、いっぱい美味しいものあるじゃないですか。一度、友達と旅行に行ったことあるんですけど、最高でした、北海道。」

満面の笑みで答えた私に日高主任が、小さくため息を吐いて、「友達ってさっき言ってた男と？」と、さっきより低い声で聞いて来る。

瑛斗と別れた後だったよな、あの時。
まるで尋問されてるような気分には、少しだけ冷めた口調で答えた。

「違います。短大の時の友達とです。」

「ふーん。」

…さっき、言ったこと事実にしなにか？」

さっき言ったこと？

「…俺の彼女。」

「へ？」

「…お前が俺の彼女ってダメか？」

私が？

日高主任の彼女？

ってどういうこと？

思考回路停止…

まさにそんな感じ。

降って湧いたような日高主任の告白に私は、上手い答えを見つけられず、ただ、私を見つめる日高主任から目を逸らせずに居た。

「俺の事好きになればいいんだよ。」

グラスを片手に私を見た日高主任が口角をあげて笑った。

「とぼけた顔してんなよ。

今から、お前は俺の彼女ね？」

訳わかんない…

私が彼女？

「何番目のですか？」

そう聞いた私に日高主任が持っていたグラスをテーブルに音を立てて置いた。

そして、大袈裟に大きくため息を吐いた。

「他に女なんて居ねえ。バカじゃねえの？」

バカ？

私が？

「…私を好きなんですか？」

つい頭を過った言葉をそのまま口にしてしまった。

言った後で大後悔…

だって、好きなんですかなんて、高飛車な言葉…。

焦ってる私に日高主任が淡々と答えた言葉に胸が否応なしに踊る。

「ずっと、好きだったよ…。今は、お前以外考えらんねえくらい。」

優しい声色に高鳴る胸の鼓動。

射るような眼差しの強さに苦しいが増える。

「俺のこと、好きになれ…」

好きになる…

好きになれる？

答えられない私の頭をポンツと撫でた日高主任が「俺に縛られてよ。他の男がお前にちよっかい出せないように…」と、微笑んだのに、無意識に頷いた私に、自分自身が驚いた。

なんて目まぐるしい一日…

「ん、じゃ、乾杯しよう。」

今日からよろしく、奈々。」

流されるままグラスを合わせた私は、気持ちを整理できないまま、戸惑うばかりだった。

戸惑う私を意に閑せず、日高主任は、私の携帯と主任の携帯を簡単に赤外線して、私の携帯の中に、日高修二と、登録された。

「電話はなかなか出れないかもしれないけど、いつでも、メールしていいから。俺もするし。」

微笑んだ日高主任に私はやっぱり戸惑ったまま、グラスに口を付けた。

甘くて、仄の酸っぱいお酒をゆっくり飲んだ。
美味しいのに、胸が苦しくて味がぼやけた。

…私、日高主任の、彼女になっちゃったのかな…

と、自分の事じゃない他人事のように思ってしまう。

こんな私で良いのかと、たくさんの不安を抱えてグラスに残ったお酒を飲み干した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9112x/>

バラード

2011年11月29日22時56分発行